日本に新しい医療文化を形成

「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の建設・運営に尽力

長瀬淑子氏は、東京大学医学部附属病院中央医療情報部の医局長として、医療分野における情報システムの品質向上に大きく貢献してきた。

長瀬氏が東京大学医学部附属病院にて勤務していたある日、国立大蔵病院院長であった故開原院長より「ドナルド・マクドナルド・ハウス」を日本に誘致する活動を推進して欲しい、と声が掛かったことが現在の活動のきっかけ。当時、国立小児病院の発展形となる国立成育医療センターの構想が進んでいた中、「他の病院にはない特徴作りをしたい」ということから、ハウスの誘致を推進する計画が進行していたのだ。「ドナルド・マクドナルド・ハウス」とは、ボランティアで運営する入院患者さんとその家族のための滞在施設で、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは一般名詞になるほど、小児医療領域では重要なパートナーとなっている。「"home away from home"-家庭から離れたところに家庭らしいぬくもりを提供する」という理念のもと、現在では世界31ヵ国317ハウス、約3万5000人ものボランティアがハウス運営のための活動を行っている。長瀬氏は、この理念を知ったとき、「医療機関に従事し、子どもがいて、家庭の主婦でもある自分なら橋渡しとしての役割があるかもしれない」と、医局から事務局への転身を決意した。

その後、当時厚生労働省からの認可が困難であった財団法人を設立し、ドナルド・マクドナルド・ハウスの建設に取り組んだ。さまざまな困難を乗り越え、2001年11月、待望の日本第1号ハウスを設立。その後、「東大ハウス」建設までの10年間で8つのハウスを設立し運営。今後も「なごやハウス」「ふくおかハウス」の建設が予定されている。ハウス設立の取り組みと並行して、国内各所のハウスで活動するボランティア組織を立ち上げ、育成に力を注いできた。その結果、現在日本では約1400人のボランティアがハウス運営のための活動を行っており、この11年で約2万3000家族、延5万人の患者さんの家族が利用している。

最近では、こども病院に付き添いの家族が安心して滞在できる施設の併設は当然のことのように認識されているが、日本にこの考えが定着してきたのは、「ドナルド・マクドナルド・ハウス」が着実に実績を作ってきたからに他ならない。事務局長として、医療・行政との調整、資金の調達、ボランティアの育成などすべてにおいて中心となり尽力された長瀬氏の実績は、医療を支援する社会の力を形成し、今後の小児医療に大きく貢献し続ける。

■ドナルド・マクドナルド・ハウスを紹介した冊子

■全国のハウスマネージャーと共に

■ボランティアメンバーとの講演会風景

長瀬 淑子（ながせ としこ） Toshiko Nagase

公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパン 事務局長

Managing Director, Ronald McDonald House Charities Japan

推薦者

門脇 孝 東京大学医学部附属病院 病院長

五十嵐 隆 独立行政法人国立成育医療研究センター理事長・総長

青山学院大学卒業。1989年東京大学附属病院中央医療情報部助手。1992年同医局長。在職中は日本医療情報学会評議員を務め、研究分野は地域情報システム、遠隔医療、病院連携システムなど。1999年第25回日本医学会総会展示幹事。放射線医学フォーラム幹事、医療フォーラム事務局長、武見太郎記念国際シンポジウム事務局長、愛知万博国連館内展示事務局長などを担当。1999年4月よりドナルド・マクドナルド・ハウス財団事務局長。滞在施設の建設・運営、ボランティア活動の支援などを行っている。独立行政法人国立成育医療研究センター倫理委員も務める。

ボランティア部門（国内）
Volunteer